

俺は一般人でありたい(錯乱)

名無しの傭兵

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある集落の逸般人の日常を覗く…

目次

- 休憩中に近所の人から久々に妹が帰つて
くると聞いてから仕事に戻ると何故かで
かい狼がいた（意味不） ————— 1
- 今朝地震があつて妹が辺りを見てくるつ
て出てつて暫くしたら超巨大なドラゴン
を連れてきた（驚愕） ————— 7

休憩中に近所の人から久々に妹が帰ってくるという噂が
仕事に戻ると何故かでかい狼がいた（意味不）

ここはリフ大陸という大陸のとある盆地の集落、俺ことクサビ・タガヤシが生活圈と
している場所だ。俺は主に畑を耕して野菜を作ったり、山で木を切ってきて、薪や炭を
製作し、それを売って生活している。今日も薪と木炭を作り終えた休憩後、畑仕事をし
ようと自分の畑に向かっていたのだが…。

「なんでA級魔獣の翁狼《おうろう》が首輪着けて畑の冊の前でおすわりしてるんですか
ねえ…。」

ほんともうわかんねえな、と言いたくなる状況になっていたりする…まあ、こいつ
に首輪着けておすわりさせられる人物に心当たりがありまくるんですがね。しかしA
級魔獣…なかなか厄介なものを連れてきたものだ、魔獣というのは魔法を扱える獣、
魔界から出てきた獣がいるがこいつは…前者なのだろう、全長は5メートル程はありそ
うだな、色は灰がかかった銀で所々に緑…いや、翠と言った方がいいか、その色の亀裂の
ような模様がある。しかもA級ときた、A級は下から5番目、上から3番目の強さであ
り、幾度の戦場を駆け抜けた戦士が挙って戦っても勝てる確率がほぼ無い程。この翁狼

2 休憩中に近所の人から久々に妹が帰ってくると聞いてから仕事に戻ると何故かでかいた（意味不）

は普通の狼が魔力を含んだものを食べ続け、長年戦い続けてきた狼しかなれない魔獣、その殆どが戦いに敗れ死んでしまうが故に個体数が極めて少ない、言うなれば狼の中の狼というものだ。

この翁狼を見ながら俺は考えていた、もうそろそろ連れてきた奴が来るはずだから来たら一発ぶちかまそうと。やりすぎではない、仕事を邪魔されたのだからそれぐらいは当然である。

「おにいいいいいちゃあああんっ！」

そら来た。

「会いたかったよ（ゴスツ）オグツ!？」

なんか叫びつつ走ってくる”妹”になんでこんなやつ連れてきたんだよという私怨を込めてチヨツプを繰り返す、無防備かつあつちから走ってくるのもあったのか額に吸い込まれるようにヒツトした。

いい気味である。

「おうう、お兄ちゃんの愛が炸裂したよ…。」

「何が愛だ…それよりお前いつここに来たんだよ、というか連絡も無しにこんな連れってくるなよな。」

まったくである。

「ムッ、こんなやつとか言わないでよねお兄ちゃんっ！この子は遅しくてかつこいいの！ほら、そんなこと言うからしよぼんってなっちゃったじゃない。」

トレードマークであるポニーテールとアホ毛を尖らせながら妹にそう言われて翁狼の方を見ると、いつの間にか頭を下げ、尻尾をしならせ、耳を折りたたみ、さも『自分…要らないんすか…』と言いたげな雰囲気醸し出していた…。

何でこんなに人間くさいんだコイツ。

いや申し訳ないけども。

「あー…いやすまん、そんなつもりで言ったんじゃないんだ。すまん…。」

そうやって翁狼に謝ると『自分…ここにいていいんすか…？』と言いたげに目を潤ませながら俺を見つめた。

…意外と可愛らしいじゃねえか…。

「とうかなんで翁狼…その前にこいつに名前ってあんのか？」

流石にいつまでも翁狼はいけないと思う、首輪も付けてあるしこの妹が飼主ということも分かる…；しかしいつまでも種族名というのも気が引けるのだ。

「んーん、いいの思いつかなかったから今はおー君って呼んで、お兄ちゃんいい名前つけてくれない？」

「え？ああ、まあいいが…そうだな、ナタ…とか？」

「どうだ？と妹と翁狼を見やる、すると翁狼が尻尾とキラキラを振りながら歓喜…？の表情で俺を見てきた、そんなに嫌だったのかおー君は…。」

妹はそんな翁狼、改めナタを見ると良かったねと微笑んだ。

「いいんじゃないかな、喜んでるみたいだしね。んじやお兄ちゃん、この子頼むよ！」

この子頼むよ？俺に飼えてか…まあ、余裕があるからいいがな。

「いきなりだな…まあ余裕もあるし、いいか。というかこいつ何食うんだよ。」

流石にこいつの好き嫌いぐらいは分かっておきたい。

「えーとね…基本的にお肉かな、魔力が籠ってるのだったらキノコとかも食べるよ。あつ、あとね、私のお仕事終わったから次のまでお兄ちゃんとこ居させてよ。」

「ああ、分かった。ありがとな、なら皆に顔見せてやれ、しばらくぶりだからちゃんと会って安心させてやってくれ。」

「うん！」

「さて、帰るか。」

妹を見送ってからしばらくして仕事が終わった。

結構長くやっていたのでもう日が暮れそうである。

あいつはもう家にいるのだろうか、そうならば飯とか色々やっておいて欲しいのだが

…まあ、望むだけ無駄だろう。あいつは家事ができないし…。
帰ったら教えてやるか。

「もうそろそろ家事とかできるようになってほしいんだがなあ…。」
嫁に行くつてなったらどうしてく「おやア？おやおやア？クサビサンじゃないですかア！」

「うおおっ!？」

何か来たアアアッ!？」

「何を驚いているんですウ？ワタクシですよ、アートルムですよオ。」

ああ…アートルムか、こいつは神出鬼没なのがデフォルムなのだ、集落の皆は会う時は必ずと言っていいほど驚いている。それはコイツの服装がまるで不審者じみてるのが原因である。シルクハットに背中に垂れるマフラー、脛辺りまである長いコートに白い手袋、しかも全身が黒くて顔があるのかどうか分からない。

正直、コ○ンの黒タイツが服着て歩いてるようなものである。

しかし皆は驚きはするもののいつもの事なので『愛嬌』として受け入れている。

しかし俺はこんなのに慣れることが出来ずにいる。

何とかして平静を保ちたい、保たなければならぬ（使命感）

「そうそうクサビサン、妹君のサクラサンが貴方の家に向かって馬鹿デカイ狼を連れて

走って行ったんですガ…アレ大丈夫なんですか？首輪は付いてましたがワタクシ、狼にいい思い出は無くてですネ。」

「ああ、なら大丈夫だろ。あいつの事だ、しつかりと躡をしてるだろうよ。」

「マア…貴方がそう言うのですか…遠目で眺めていまシヨウかネ。」

「ああ、そうした方がいいんじゃないか。」

「では、ワタクシはこの辺りで失礼しますヨ。またお会いしまシヨウ！」

「おう、またな。」

そう言つてアートルムは立ち去つていった。

…さて、うちに帰るか。

サクラも待つているだろうし、飯も作つてやらなきやならんしな。

今朝地震があつて妹が辺りを見てくるつて出てつて暫くしたら超巨大なドラゴンを連れてきた（驚愕）

ゴゴゴゴゴゴゴゴ…

皆は朝飯食つてる時に地震が発生したらどうする。

「ヤバい…作物とかがヤバい…」

俺は農作物の心配をする（異常）

「お兄ちゃん、作物とかじゃなくて周りの人を助けるのが先ね。私はちよつと外見てるから後はよろしく！」

「おう、ナタ連れてくけどいいよな。」

「おっけー！」

さて、集落の皆を助けに向かうとしよう。

しかし俺一人では少しキツイのでナタを連れていくことにする。

幸いにもそこまで大きな地震でもない為、家の崩壊や地割れなどの心配はそこまではないが、土砂崩れ等の災害が起こらないという確証はない。

「何ともないといいんだがなあ…まあ、大丈夫だろ。」

「誰だ何ともないといいなつてフラグ建てやがったのは」

はい！私です！（自分自身）

あのあと俺はナタを連れて集落の爺さんや婆さん達、小さい子を安全な所まで避難させていた。

無事に避難は済んだのだ、済んだのだが…集落の入口を少し行つたところにある2つの山の間にもうひとつ山の、ようなものゝが見えた。

それが見えた瞬間、ナタが威嚇するようにグルルル、と唸り始めたのだ、ただ事ではないのは直ぐに理解した。

何か…（胃が痛くなるような）嫌な予感がする。

何故…何故、地震だけで終わつてくれないのか、あれか、俺は厄介事を引き付ける異能《ちから》でもあつたのか。

ん…？近づいてきてるのかアレ、勘弁してくれ、地震とか地響きが酷くなつて…ア、ア、ツ（声にならない叫び）水瓢箪《みずびょうたん》の木が倒れたっ!?!アレは果肉に水を大量に取り込んでるからめっちゃ重いし落ちたら破裂して辺り一面水浸しになるんだよ…。収穫してから2時間経てば外側が固まって水筒みたいに使えるんだがなあ…。ありやダメか…？植え直せばギリギリいけるかもしれない…生存能力は他と

違つて高い方だから…うん。

「おーいクサビく、なにやつてんの〜?」

この間延びしたような喋り方は…

「アカリか、丁度いい。山みたいな凶体の魔獣なんかついているのか? あつたら教えてくれ、あと弱点みたいなのも。」

今話しかけてきた彼女は カキ・アカリ 肩ほどに伸ばした艶のいい赤髪、ほわつとした雰囲気を醸し出すタレ目と眼鏡、身長は大体150もないくらい、しかし年は俺とさほど変わらない。

所謂、合法ロリというものである。

しかし、この集落一の頭脳派で通つていて魔獣や自然に関しても詳しく知っているため、ちみつ子からは博士と呼ばれている。

萌える。

「山みたいな凶体い〜? いるっちゃいるけど〜…あ〜今こつちに来てるアレ〜?」

「そうだ、アレだ、凄く大きいアレだ。」

「あんなの(集落に) いたら(集落が) 壊れちゃうね〜。」

後、言動がたまに危なくなることがあつたりなかつたりする。

「そうなつちゃう前に追い返すんだよ、だから教えてくれつて。」

「え〜つとねえ…多分アレは山亀っていうドラゴンだろうねえ、たしか顎と口…それ以外弱点みたいなのは無いよお。」

「それが分かれれば十分だ、ありがとなアカリ」

「どーいたしましてー」

「んじやあ行くぞ、ナタ」

アカリに感謝をし、ナタに呼びかけたあと、俺はナタよりも、速く跳び出した。あの山まで少しある、と言ったが普通に歩いていけば2時間は掛かる距離、そこまで俺は10分程度で行けるのだ。

何故か？

「地面走ってこけたら危ないからな、空ならいいだろ。」

という感じで空を、跳んでいる。からだ。

ちなみにナタは普通に下を走っている。相当な速さで。

「多分先にサクラがいつてるだろうしな…、うまい具合に誘導でもしてくれんかなあ。」

独り言を垂れ流しつつ山亀を目標にして跳ぶ。

さて、こいつがどっかいった後が面倒だな…。